

日本語文章指導に使用される「中心文」 という用語の持つ問題点

田島ますみ
佐藤 尚子
小林佳代子

- <目次>
- 1 はじめに
 - 1.1 大学レベルでの日本語文章指導の導入
 - 1.2 指導に使用される用語に関する問題
 - 2 段落構造を示す用語
 - 2.1 段落の構造モデル
 - 2.2 パラグラフ・ライティングとの照応
 - 3 「中心文」という名付けの不適切さ
 - 4 「中心文」とは何か
 - 4.1 「中心文」の定義
 - 4.2 「中心文」の位置
 - 5 「中心文」が使われる理由
 - 5.1 「主題文」の二つの定義
 - 5.2 「話題文」の問題
 - 6 おわりに
 - 6.1 結論
 - 6.2 位置の問題

1 はじめに

1.1 大学レベルでの日本語文章指導の導入

ここ数年、初年次教育などに「日本語表現法」などというタイトルで、レポートの書き方など、大学で必要な論述的な文章を作成する能力を養成する科目の導入が相次いでいる。

その原因の一つは、大学入学以前の中等教育までの段階で、論述的な文章を書く指導が少なく不十分なことである。従来の国語教育では、文章を書くという作業は作文教育において行われるが、そこでどのような種類の文章を書いているかという点、多くが読書感想などの感想文と、初等教育段階では遠足や運動会など実際に体験したことを書く、いわゆる「やったこと」作文である場合が多い。入学試験の科目に「小論文」がある場合、受験対策として指導される場合もあるが、指導を受ける生徒は特定されるであろうし、受験対策という枠組みの中にあっては指導が限定される事情もあるだろう。いずれにせよ大学の「学び」に必要な論述的な文章の作成についての指導は、不十分な現状であると言える。

また他の原因として、大学生の日本語力の低下が挙げられる。以前であれば、大学入学以前に学んでいなくても自然習得できたことが習得できなくなっている実態がある。特に第一言語として普段特に意識せずに使っている日本語であれば、自分の書いている日本語の不適切さに気づきにくいという問題がある。向上心や学習意欲に乏しい学生が第一言語の能力を伸ばしていくことは非常に難しい。自然習得が難しい学生には体系的に学習させることが必要である。

このような状況の改善策として、文章作成能力を指導する科目の導入が増え、それに伴い指導教材も続々と出てきている。さらに日本語を第一言語としない留学生も増加していることから、大学レベルで学ぶ留学生を対象とし

た文章作成教材も数多く出版されている。第一言語としての日本語，第二言語としての日本語，あるいはその区別を特に問わない形で，文章指導のための教材が次々に開発されているという状況にある。

1.2 指導に使用される用語に関しての問題

それらの教材の中で，本稿が問題として指摘したいのは，段落の構造を示す際に使用される「中心文」という名付けである。これは，英語の「パラグラフ・ライティング」と呼ばれる文章作成法と比較すると，「トピック・センテンス」に対応するものとして使われている用語であることがわかる。「トピック・センテンス」に対応するものであるならば，「主題文」としたほうが段落内での役割をより正確に表す名付けとなるが，なぜ「中心文」なのか。本稿の筆者は，文章指導において「中心文」という名付けには問題があり，「中心文」ではなく「主題文」とする名付けが適切であると考え。以下，文章指導に用いられている段落構造のモデルの概略を述べた上で，「中心文」という名付けの問題点を詳述し，なぜこの不適切と考えられる用語が使用されているのかを考察する。

2 段落構造を示す用語

2.1 段落の構造モデル

前述したように，従来の国語教育では論述的な文章作成のための指導は十分になされてこなかったし，日本語には確立した論述的文章作成の方法というものもない。文章内の単位として，複数の文が集まって一つの意味のまとまりをなす「段落」という概念も，日本語ではあまり明確には意識されず，漠然と意味の切れ目程度に認識されている。例えば，数研出版の『クリアカラー国語便覧』⁽¹⁾では，「段落は次のようなときに立てる」として，「場面，題材が変化するとき」「論点⁽¹⁾が変化するとき」「一段落では長くなり，わかりづ

らくなるとき」という三つの場合を挙げている。段落に関しての明確な定義とは言いがたい。他の文献を見ても段落とは何かについての説明はなく、むしろ段落が変わるときに改行して行頭は1字あけるというような段落の表記に関しての説明がされていたりする。

このように段落に対する希薄な意識をまずは改め、段落とは何かを考えさせ、文章の構成の明確な意識化を促すことを目標として、段落の構造モデルを示すものが、最近の文章指導教材に多く見られる。「意味のまとまり」といったあいまいな説明ではなく、段落内の文はどのような役割を担って一つの段落というまとまりを構成しているのかを示すのである。例えば、二通信子ほかによる『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』(2003)⁽²⁾では、段落の中心的内容を表す文を「中心文」、中心文を支える文を「支持文」、段落の内容をまとめる文を「まとめ文」と名付けている。大島弥生ほかによる『ピアで学ぶ大学生の日本語表現』(2005)⁽³⁾でも、「中心文」が同様に定義され、段落の内容をまとめる文をこちらでは「結び文」としている。いずれの教材も各文の役割を示し、さらに書く順番も「中心文」「支持文」「まとめ文／結び文」というように指定している。

2.2 パラグラフ・ライティングとの照応

段落の構造モデルを示し、3種類の役割を担う文を順番に書くというこの指導法は、英語の文章作成法として定着しているパラグラフ・ライティングと照応している。日本語の論述的文章作成をどうやって指導するかということが問題となったとき、まずは既に基礎的な文章作成法として確立していた英語の方法は大いに参考にされたに違いない。パラグラフ・ライティングの中でも、最も典型的なモデルとして単純化された構造を示す、「トピック・センテンス」「サポーティング・センテンス」「コンクルーディング・センテンス」から成るパラグラフのモデルは、日本語文章指導の教材で使用されているモデルと形の上では同じものである。

しかし、日本語は英語とは異なる性質を持つ言語である。文の意味は文末

において決定される。一つの段落、一つの文章など、一まとまりの談話の中では、後ろの方に筆者の主張や結論などの重要な部分が出やすい傾向がある。「トピック・センテンス」がはじめにくるモデルは、文レベルにしても談話レベルにしても後方が重くなる構造がある日本語にとって、けっしてなじみやすいものではない。一方で、重要な部分や結論的な部分が後にくることが、日本語の文章のわかりにくさとなることは、かなりの程度で言えることである。特に論述的な文章となれば、重要なことを後にとっておくより、前に持ってきて簡潔に示してからそれをサポートする形で論述していったほうが、論旨はすっきりとわかりやすくなる。英語のモデルが日本語にも有効であるとの認識の下に、日本語文章指導の教材に使用されているのであろう。

段落構造を示すそれぞれの用語を見てみると、英語のトピック・センテンスが日本語の「中心文」と対応し、トピック・センテンスを支えるサポートリング・センテンスが「支持文」と、パラグラフの内容をまとめるコンクルーディング・センテンスが「結び文」または「まとめ文」に対応している。「支持文」「まとめ文／結び文」は英語の逐語訳とも一致する。しかし、「中心文」と「トピック・センテンス」は訳語としては一致していない。なぜ日本語では「中心文」なのか。「トピック・センテンス」の原語に最も近い訳語は「主題文」であり、実際、英語のパラグラフ・ライティングの教材では、トピック・センテンスに「主題文」の訳語をつけて解説するものが多い。日本語の文章指導では、なぜ「主題文」ではなく「中心文」となっているのか。三つの用語のうち、二つは忠実な訳語と一致しているのに対し、一つが一致していないことが、本稿執筆の動機である。

3 「中心文」という名付けの不適切さ

本稿の筆者は、「中心文」ではなく「主題文」とすべきという立場をとるが、「中心文」という名付けが単に「トピック・センテンス」の忠実な訳に

なっていないという理由で問題であると主張するわけではない。「中心文」が段落内での位置を次のように指示されるときに問題が起こる、と考える。

英語のパラグラフ・ライティングでは、トピック・センテンスをパラグラフの第一文とせよとする指示が一般的である。トピック・センテンスが他の位置にくる場合も説明されていることもあるが、パラグラフ・ライティングが初歩的な文章指導であることを考慮し単純に簡略化して、トピック・センテンスが第一文にくるモデルのみを示しているものが多い。

日本語の指導教材でも、「中心文」は段落のはじめに書くと指示される。しかし、「中心」という語は、場所的な中央、真ん中という位置を表す意味が一義で、そこから、非常に大事なものという意味が派生している。段落の「はじめ」という、いわば周辺に中心となるものを持ってくるという第一の語義とは矛盾する指示が、日本語として非常に違和感を生じさせるのである。

また、英語のパラグラフ・ライティングと同様の構造モデルを用い、用語も英語の直訳に照応するものを使っている中で、「中心文」と「トピック・センテンス」だけ異なっている状況は、英語のパラグラフ・ライティングを学んだ者にとって、なぜここだけが違うのかという疑問を引き起こすであろう。筆者は最初に見てまず疑問に思ったが、この点に関して今まで考慮されたことはなかったのだろうか。大いに疑問とするところである。

4 「中心文」とは何か

4.1 「中心文」の定義

日本語の語義に照らして問題のある用語「中心文」が、なぜトピック・センテンスに対応するものとして使われているのか。日本語の「中心文」は英語のトピック・センテンスとは違うものではないかという疑問から、「中心文」の定義をあらためて調べてみた。

市川⁽⁴⁾ (1978) は「中心文」に関して以下のような説明をしている。

(……) 段落の内部に、中心文の認められることがある。中心文とは、段落における中心的内容(小主題)を端的に述べている文のことである。トピック・センテンスとも呼ばれる。中心文は、どの段落にもあるとは限らないが、その反面、一つの段落に、二つ(以上)の中心文の含まれることもある。

さらに、主なタイプとして「要約的中心文」と「結論的中心文」があり、その位置について、前者は「段落の始めや終わりなどに」、後者は「段落の終わりや始めなどに置かれる」としている。

引用の最初の部分、「段落における中心的内容(小主題)を端的に述べている文」という定義は多くの文献に共通のもので、これが一般的な「中心文」の定義と言える。これを見る限り、英語のトピック・センテンスと変わりはない。

しかし、次の説明部分を見ると、かなりずれてくることがわかる。英語のトピック・センテンスは、一つのパラグラフに一つ、また、たいてい第一文に位置するものとされる。⁽⁵⁾日本語のように、段落の中にあるかもしれないし、ないかもしれないし、二つ、あるいはそれ以上の数があるかもしれないと説明される「中心文」とは大きく異なる。さらに言えば、「要約的中心文」が英語のトピック・センテンスに近いものであり、「結論的中心文」はコンクルーディング・センテンスにより近いものとみなす解釈も成り立つ。これほど異なれば「中心文」と「トピック・センテンス」を同じものとして扱うのは無理がある。

現実の日本語の文章では、「中心文」はパラグラフ・ライティングのトピック・センテンスのように明瞭なものではない。段落の中心的内容を述べる文は、ジャンルを限らずに日本語一般の文章を対象とすれば、市川(1978)のようなあいまいな説明にならざるを得ない。

4.2 「中心文」の位置

日本語での「中心文」の位置を表す具体的な例として、佐藤喜久夫監修『国際化・情報化社会へ向けての表現技術1』⁽⁶⁾に掲載されている練習問題を引用しよう。以下の段落の「中心文」はどれかというのが問題である。

①勉強や部活動が忙しくて、本を読む時間がないという人が多い。②しかし、毎日の生活をふり返ってみれば、テレビを見たりマンガを見たりしている時間がけっこうあるのではないだろうか。③本を読む時間がないというのは、たんなる言い訳にしかすぎないのである。

正解は③の最後の文である。この段落は、日本語としてわかりやすく言いたいこともすぐに伝わる明快な文章である。「中心文」を最後にしたことわかりにくくなっているということはない。このように、内容の中心となる文は日本語の場合、特に段落の最初に来るとは限らないのである。

「中心文を段落のはじめに」という文章指導を受ける学生は、実際の日本語の文章に日々接している。また、上記のような練習問題を解く機会もある。「中心文」がさまざまな位置にくる日本語を読んでいる学生にとって、「中心文を段落の第一文にすべき」という指導は、混乱を引き起こす恐れがある。また、混乱よりも、そのような矛盾を抱え込む指導に対して不信感を抱かないか、という心配のほうがより深刻な問題である。

「中心文」という用語は、筆者の参考にした文献を見る限り、国語教育の読解指導、あるいは日本語の談話分析など、読解、分析といった言語の受容に関わる文脈で使用されてきたことがわかる。日本語においては、前述のように「中心文」の位置はさまざまである。その用語が最近、文章作成指導という言語の産出の文脈に転用され、「中心文」を第一文にすべしと指導することで矛盾が生じるのである。「段落の中心的内容を端的に示す文を段落のはじめに持ってくるべし」という指導は、あくまでも、論述的な文章に限る

という限定をした上で、基本的なモデルとして提示していることを忘れてはならない。論述的な文章作成指導の用語に、これまで一般的な日本語を読解、分析する際に使われていた用語を転用することには問題があるのである。

5 「中心文」が使われる理由

前項のように「中心文」という名付けには問題がある。それにも関わらず、なぜ「中心文」を使う文献・教材が多く、逆に「主題文」はほとんど使われていないのだろうか。まず考えられるのは、「段落の中心的内容を示す文」であるから「中心文」にするという、一見至極まともな理由である。また、読解指導ではよく使われてきた用語であって新規のものではなく、指導に使う用語としては適切と思われるということも挙げられるだろう。しかし、「中心文」と「トピック・センテンス」の示すものにずれがあるというのは前述の通りである。加えて「中心となるものをはじめに」という指示に対する違和感もある。

また、「中心文」を使って「主題文」を避ける理由としては以下の2点が挙げられる。特に先に述べる第一の理由、文章全体のテーマを表す「主題文」との混同を避けるため、ということが大きいのではないかと考えている。

5.1 「主題文」の二つの定義

まず、第一の理由として、「主題文」には2種類の文を指す可能性があり、紛らわしいという点である。「主題文」をトピック・センテンスに対応するものとして扱っている文献は確かに存在している⁽⁷⁾。しかし、他に齊山・沖田⁽⁸⁾(1996)では「主題文」を文章全体のテーマを示すものとして用いている。これは、木下⁽⁹⁾(1981)のいう「目標規定文」に相当するものである。日本語で「主題」というとトピック・センテンスのトピックというよりもっと大

きな、たとえば研究のテーマやレポートの題目といったものがイメージされやすい事情がある。「主題文」とした場合、この「文章全体のテーマを示す文」との混同の恐れがあるため、あまり使われていないということが考えられる。

5.2 「話題文」の問題

もう一つの理由としては、佐久間⁽¹⁰⁾ (1983) の論文で「話題文」という訳語に関して述べられていることが参考になる。佐久間は、その論文を書いた時点、すなわち1983年頃に、トピック・センテンスの訳語として当時「最も多く用いられてい」た「話題文」という用語に関して否定的な見解を述べている。まず、英文では、「パラグラフの中心的な考えを表す文」が「トピック・センテンス」であり、それは「パラグラフで述べる話題についての筆者の主張や意見を示した文」であるという定義を紹介している。その定義の趣旨を考えて、もし「トピック・センテンス」が「単なる話の題材を表す文」というような「話題文」と解釈されるならば、「その段落の統一性はあまり保証されないし、有効な作文法にもならないはずである」と述べている。

確かに、一般的な日本語においては、段落の導入部は、話題に関して単に「触れる、ほのめかす、なげかける」というような程度のもが多く見られる。「話題文」という用語から日本人がイメージしやすいのは、話題を提示する切り出しや言い出しであって、伝えたい論を端的に示すという役割を意味できるかどうかは疑問である。そのような「話題文」であれば、それを論述的な文章を書く際にはじめに書いても論旨を明確にするということにはつながらない。となれば「話題文」をはじめに書くように指導することも有効ではない。

この理由と同様に、「主題文」も話題や主題を提供する、あるいは示すといったレベルで解釈され、肝心の「中心的な内容を示す」という要素を盛り込めないという弱みが考えられる。論述的な文章では、段落内の文が持つ結束性が重要となり、そのような段落を書くには段落のはじめに内容を統括す

る文を置くことが効果的である。はじめに書くのはこれから述べる題目を単に示すだけではない、内容や論旨をまとめた文であるという、論述的な文章作成指導法において強調したい点が、「主題文」と名付けることで薄まってしまう恐れはある。よって「主題文」ではなく、あえて「中心文」としたという理由も考えられる。

6 おわりに

6.1 結論

以上の論考のまとめとして本稿で主張したいことを繰り返す。「中心文」は日本語の文章を読む、あるいは分析するには問題のない適切な用語である。読解指導に「中心文」に線を引きなさい、といった指示は有効だろう。しかし、文章作成指導の用語として使うことには疑問を感じる。「段落の中心的内容を端的に示す中心文」は実際の日本語で必ずしもはじめにくるわけではないことを考えれば、「中心文」という言い方を避けて、段落で述べることを端的に示す文としての「主題文」のほうが適切ではないだろうか。これは英語の「トピック・センテンス」とも照応し、英語のパラグラフ・ライティングを学習した者にとっても受け入れやすい。

「主題文」が避けられた理由は前述のように考察したが、そのような問題があってもなお、指導法に矛盾を抱え、学生に混乱を与えることに比べれば軽いものとする。また、第一の理由に関しては、木下(1981)の「目標規定文」などのように、文章全体の主題を表す文のほうに対して別の用語を用いれば済む。第二の理由については、「単なる話題提示文」のように解釈される恐れがあるという、いわば仮想上の理由であって、「主題文」の使用を避ける説得力ある理由にはならない。いずれも「中心文」が読解・分析という受容場面と文章作成という産出場面との間で生み出す矛盾よりも重い問題ではない。

一般的に段落に対しての意識が希薄な日本語の状況を見れば、論述的文章作成の基本として、1パラグラフに1トピックとすべしと指導し、構造モデルを示すことは、わかりやすい文章構成を意識させるための明確な指針となる。現在の日本語文章指導法は英語のパラグラフ・ライティングを大いに参考にしていると思うが、なぜ他の部分は英語のものをそのまま使い、トピック・センテンスのみ「中心文」としたのか。それが、前項で述べたような日本語の事情に対する考慮というのであるならば、もう一步踏み込み、「中心文」を段落の第一文にせよという指導が引き起こす問題に関しても考慮されるべきではなかったか。筆者は「主題文」と名付けることを支持する。

6.2 位置の問題

最後に、「段落の中心的な内容を表す文」の位置に関する問題について若干言及したい。本稿では「中心文」という名付けの問題を検討した。しかし、これに関して今一つ重要な問題は、「段落の中心的内容を端的に示す文」の位置である。

前述したように日本語は文レベルにしても談話レベルにしても後方が重くなる構造がある。伝統的な文章構成では、「尾括型」と名付けられた最後に中心となる文を持ってきてまとめて締めくくるという形式も認められている。また、段落が、たとえば文章全体の導入部、あるいは結論部であれば、その「段落の中心的内容を端的に示す文」は、はじめではなく終わりにくる場合も多々ある。そのような言語としての性質を無視して、「中心文を段落のはじめに書きなさい」という指導を一律に適用していくことは危険を伴うであろう。場合によっては、頭がかなり重たい、唐突に始まる文章となる恐れがあると考えられる。過剰な適用をしないよう、十分な配慮が必要である。

筆者は段落構造モデルを示す指導の効用を否定するものではない。しかし、日本語の指導をしている以上、日本語の特質にもっと敏感であって然るべきであると考えられる。「中心文をはじめに」という指導に違和感を覚えたの

は筆者だけではないはずである。重点を先行させる段落の書き方を指導することは、論述的な文章を作成する上での、いわば最初の一步、基本中の基本の練習をさせているのだということは心に留めておくべきであろう。

〔引用文献〕

- (1) 青木五郎ほか監修 2004『クリアカラー国語便覧』第二版 数研出版 p. 311
- (2) 二通信子・佐藤不二子 2003『改訂版 留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク p. 39
- (3) 大島弥生ほか 2005『ピアで学ぶ大学生の日本語表現』ひつじ書房 p. 56
- (4) 市川孝 1978『国語教育のための文章論概説』教育出版 p. 127
- (5) Oshima, A. & Hogue, A. 2006 “Writing academic English”, Fourth edition. New York : Pearson Education. pp. 3-5
- (6) 佐藤喜久雄監修 1994『国際化・情報化社会へ向けての表現技術1「伝える」「考える」ための演習ノート』創拓社出版 p. 41
- (7) 清水康行 1997『日本語表現法』日本放送出版協会 p. 129
- (8) 齊山弥生・沖田弓子 1996『研究発表の方法 留学生のためのレポート作成・口頭発表の準備の手引き』産能短期大学国際交流センター p. 27
- (9) 木下是雄 1981『理科系の作文技術』中公新書 p. 22
- (10) 佐久間まゆみ 1983「段落とパラグラフ」『日本語学』第2巻第2号 p. 25

上記以外の主な参考文献

- (1) 有元秀文 2001「書くことの教育」『現代日本語講座 第2巻 表現』飛田良文・佐藤武義編 明治書院 pp. 79-97
- (2) 佐久間まゆみ 1989「作文力の養成法—段落作成と要約作文—」『講座日本語と日本語教育13 日本語教育教授法(上)』寺村秀夫編 明治書院 pp. 302-323
- (3) 佐久間まゆみ編 2003『朝倉日本語講座7 文章・談話』朝倉書店
- (4) 産能短期大学日本語教育研究室編 2003『大学生のための日本語』産能大学出版部
- (5) 橋内武 1995『パラグラフ・ライティング入門』研究社
- (6) 森岡健二 1966『文章構成法』至文堂